



## [英語起源の外来語]

外国から来て日本語になったコトバを外来語といいます。いちばん多いのが、中国からきた漢語起源のコトバですがこれはふつう外来語とはいえません。それなしには日本語が成り立たないほど多いからでしょう。

鑄造を含む工学関係では西欧からの外来語がたくさんあり、ふだん何気なく使っていますが、よく考えてみると由来のあいまいなコトバもあるので、この際すっきりさせようと調べてみました。

【プランジャーチップ】この場合のチップは chip か tip か、私はどっちかよくわからないでいましたが、あらためて辞書を見ると chip には木の切端、薄切り(ポテトチップスなど)、ポーカーの札、集積回路、などの意味があり、tip には先端、石突、倒す、打つ、心付け、ヒント、などの意味があり、プランジャーチップは石突というのにいちばん近そうなので、tip が正解のようです。

【ストーク】低圧鑄造で溶湯を押し上げる管をストークといいます。この発音に近い英語を調べると、(1)stork こうのとりの、(2)stoke 燃料補給する(stoker 給炭機)、(3)stalk 忍び寄る(stalker 忍び寄る者)、(4)stalk 茎、軸、高い煙突、ガラスの脚、などがありました。低圧鑄造はコウノトリにもストーカーにも関係なさそうだから、(4)の高い煙突が正しそうです。

【バリ、バリ取り】型あわせ面から「張り」出しているからバリ、かとおもうとそうではなく、英語 bur (いが、くっついて離れない厄介物)からきたようです。バリ取りは debur, deburring となります。

【バフ、バフ研磨】漢字で羽布と書くこともあるので日本語みたいですが、英語 buff (黄褐色の揉み革、革を張った研ぎ棒、揉み革・研ぎ棒で磨く)からきています。

(つづく)

## 【英語起源の外来語】（つづき）

【キャップタイヤ・ケーブル】 太い被覆電線のことをいいますが、英語の cabtyre (tire でもよい) から来ています。したがって、キャップでなくてキャブタイヤと書くのが正しい。英語の cab はフランス語 cabriolet からきており、2輪の辻馬車のことで、その車輪に硬質ゴムを巻いたのが cab tyre です (cab tyre 装着以前の鉄輪の馬車が石畳を走るときはさぞ振動・騒音がひどかったことでしょう。Cab tyre は空気入りタイヤ発明以前のことですが、それでもずいぶん楽になったと思います)。ゴムで被覆した太い電線がこれに似ていたので cab tyre cable と呼んだわけです。

ちなみに「日本語になった外国語辞典」(集英社) という本を見たら captyre cable と書いてありましたが、そんなコトバは英語の辞書にはみつからず、いいかげんな本であることがわかります。なお客を乗せる辻馬車を taxi cab といったのですが、馬をやめて自動車になったいまもコトバは変わらず、いまだに英国では taxi、日本でもタクシー、米国では cab と呼んでいます (例: yellow cab)。

【ラドル】 ダイカスト関係者のいうラドルは英語の ladle (取鍋) のことでしょうかから、発音はレードルが正しいはず。砂型鑄造や鉄鋼関係ではちゃんとレードルと書いています。どうしてダイカストではラドルになってしまったのでしょうかね？ でもいまさら正しい英語のつもりでレードルなんていっていても、日本のダイカスト業界では「あいつはコトバを知らない」とバカにされるのが関の山かもしれません。

【棒心、棒芯(ぼうしん)】 職制の名称で現場の職長をいう。語源としては、「棒の芯」だからという一見もっともな説もあるが、ではなぜ「棒」？ ときかかれたら答えにくいでしょう。英語の海事用語 boatswain (甲板長) からきたという説が正しいと思います。

【芯出し】 文字通り芯を正しく出すことだから日本語とおもってだれも疑わないようですが、よく考えるとちょっと不自然ではないですか？ もしかしたら英語の centering が語源ではないかと私は想像しています。古い外来語には硝子、背広、馬穴、釦、燐寸、煙草、羅紗、など上手に漢字が宛ててあるので、漢字だから日本語だと安心するわけにはいきません。